

勾當。

待て、待て。まつ代は年の割に利口な奴だ。どうも先刻からそこらに誰かゝるやうだと思つたが、もしや隠れて聴いてゐたのではないか。

舞琴。

これ、松代。お前さつきからそこにあるたのかえ。

(まつ代泣きながら首肯く。舞琴さつきとして勾當の手を取る。)

勾當。

は、は、は。今のはみんな冗談だ。こんな立派な引祝ひまでした舞琴がなんで冥土などへ行くものか。おれ達も直にあとから座敷へゆくほどに、おまへは一足先へゆけ。ぐづくしてゐると、痛い目に逢ふぞ。

まつ代。

あい。

勾當。

抓らねたいか。

まつ代。

いゝえ。(泣いてゐる。)

勾當。

そんならおとなしく行け、ゆけ。

まつ代。

そんならお前達も直にあとから来さんすかえ。

勾當。

おゝ、ほかの者が聴いたらば、おれ達は直にゆくと云ふのだぞ。

まつ代。

あい。

(松代行きかけて踏きて轉ぶ。舞琴かけ寄つて抱き起す。)

清元 露うちかけの菊がさね、菊のませたる禿菊

(舞琴はまつ代を抱へて、ちつとなる。まつ代は舞琴に手をかけて顔を見く。)

勾當。

舞琴、舞琴。

舞琴。

あい、あい。これ、まつ代。さつき抓るといふたは嘘で、わたしはやつぱりお前を可愛がつてゐるほどに、かならず泣きなさんすな。よいかえ。

まつ代。

あい。

舞琴。

わたしがこのあひだ買つて遣つたあの人形は、いつまでも大事に持つてゐや。わたしが居なくなつたら、遣手のお虎どんの云ふことをよく聞きなさんせ。あの人に憎まれたら、それこそ本當に抓られますぞ。

まつ代。

あい。

舞琴。

さあ、わかつたら早う行きや。

まつ代。

あい。あい。(下のかたに去る。)

勾當。

まつ代はもう行つたか。あゝして欺して遣つたものゝ、座敷へ歸つてなにを云はうも知れ



舞 琴。  
勾 當。

又もや邪魔のないうちに……。所詮は金につまつて死ぬ身ながら、世間のありふれた心中のやうに、みじめな死が仕たくなさに、面白いこと派手なこと仕度三昧仕盡して、榮華の夢のさめぬ中にこの世を去るのが豫ての覺悟だ。はて、何のおもひ残すことがあらうぞ。場所は隅田川、空はおほろ月夜、見えぬながらも美しいさうな春の世界だ。

舞 琴。

丁度櫻も花ざかり、繪のやうな風情でござんすぞえ。

勾 當。

（奥にて三味線太鼓の音賑かにきこゆ。）  
いつの間にか清元も止んで、今度はなにか賑かに囃し立てゝゐるやうだな。向うでも面白さうに浮かれてゐる。（ほゝ笑む。）あの歡樂のひゞきを聞きながら。

舞 琴。

ふたりは隅田川の底へ沈んで……。

勾 當。

都鳥の夢を驚かさうか。

（三味線太鼓の音つゞけてきこゆ。舞琴は勾當の手をひきて上の方に忍びゆく。やがて下のかたより水神の伊之助は鉢巻、片肌ぬぎにて出刃庖丁を持ちて走り出づ。そのあとより藝者おみのは棧を

（又行きかゝるをおみのは押へる。）

おみの。

からげ、素足にて追つて出づ。）  
もし、伊之助さん。お前、どうしようと言ふんだえ。

伊之助。

さつきの意趣がへしに、あの盲坊主の土手つ腹を扶らなけりやあ料簡ならねえ。えゝ、放さねえか。なんでも男と女はこつちへ來たに違えねえのだ。

おみの。

まあ、そんな短氣なことをおしでないよ。まあ、後生だからお待ちと云ふのに……。相手

を殺せばお前も生きちやあるられないよ。

伊之助。

そりやあ云はずと知れたことだ。

おみの。

（又行きかゝるをおみのは押へる。）  
それぢやあお前、どんな苦勞をしても一緒になると云つたのはみんな嘘かえ。

伊之助。

え。

おみの。

どんな思ひをしても何日までも生きてゐなければ、ふたりは末長く添はれないよ。よくか

伊之助。

むゝ。

（上の方にて「身投げだ、身投げだ。心中だ、心中だ。」と四五人の呼ぶ聲する。）



伊之助。  
なに、心中だ。(思はず上の方をみる。)

まさかに旦那と花魁ぢやあるまいねえ。

(奥の鳴物は俄にやむ。二人は肩をみあはせてゐる。薄く浪の音。)

幕

大正十四年十二月十三日印刷  
大正十四年十二月十六日發行

綺堂戲曲集第拾卷  
(定價金貳圓參拾錢)

印檢者著作



著作者 岡本敬二

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者 堀江關武

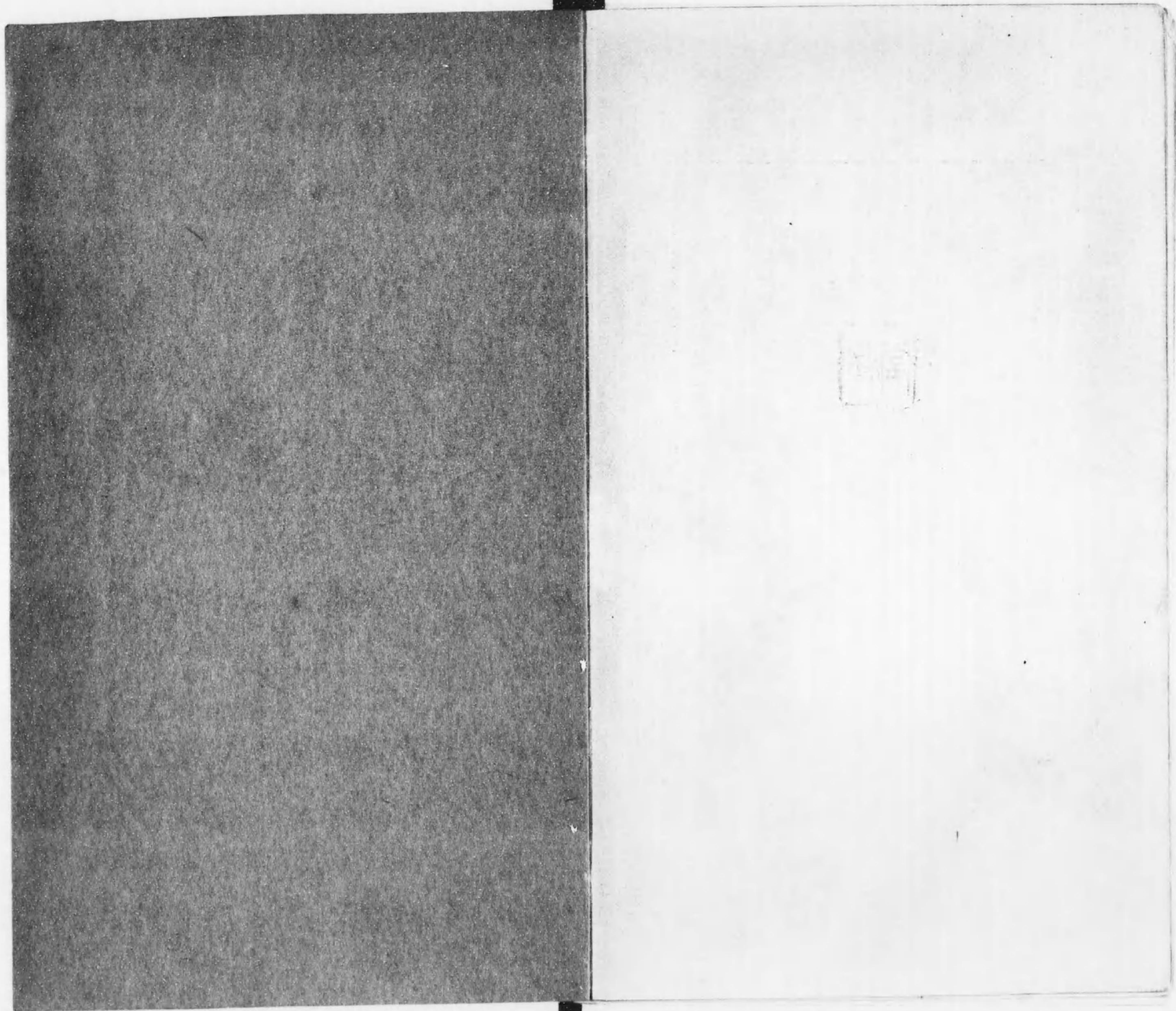
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所 常磐印刷所

發行所 春陽堂

東京市日本橋區通四丁目五番地  
(電話大手五・四二一〇)  
(振替口座東京一六一七)







527  
16



終